

## 接收

- 昭和20年（1945）8月15日
- ・ 太平洋戦争終戦
- 8月30日
- ・ マッカーサー元帥が厚木に到着し、先遣隊とともに横浜へ進駐
- 9月 6日
- ・ GHQから2人の大佐が「第一生命館」に来社。矢野一郎常務取締役が面接して社屋の説明をし、図面や資料を提供
- 9月 7日
- ・ GHQの参謀副長で設営の責任者であるイーストウッド代将と工兵隊司令官であるケイシー少将が来社。「GHQ用庁舎として第一生命館を使用することになるので了承されたい」旨の申し出を受ける
- 9月 8日
- ・ 東京に入ったマッカーサー元帥は、帝国ホテルでの昼食会に先立ち、同ホテル社長の案内で20分間ほど周辺を視察。その際、日比谷の交差点を渡ったときに一番目立った「第一生命館」が目にとまった
  - その時に印象に残ったのか、部下たちだけで「第一生命館」など接收候補を検分する予定だったが、マッカーサー元帥自ら足を運ぶこととし、部下を従えて「第一生命館」に来社。矢野常務とイーストウッド代将の案内で6階の社長室、貴賓室などを見た後、検分を予定していた他のビルには立ち寄りず、横浜の宿舎に帰る
  - ・ 接收についてはイーストウッド代将から口頭で通告される
  - ・ 立地条件や建物の堅牢さ等により「第一生命館」がGHQ用庁舎に選ばれたと伝えられている
- 9月10日 午後
- ・ 日本政府から正式に「第一生命館」の接收通知を受ける
    - ① 建物の地上部分はすべて接收、地下の使用は会社に任ず
    - ② 書類を除き家具その他一切の持ち出しを禁止する
    - ③ 明け渡しの期限は9月15日正午とする
  - ・ 第一生命は移転先の確保に苦慮するも、京橋の「第一相互館」の大部分を使用していた大日本麦酒（後のアサヒビールならびにサッポロビール）の山本為三郎専務（後のアサヒビール社長）から、「当方は銀座と目黒に引き揚げるので、すぐにでも京橋の方に荷物を運びこまれるとよい」との申し出をいただき、移転先の問題は解決。トラックや作業員の確保など移転作業は困難を極めたが、14日午後引渡しの準備が整う
- 9月15日 正午
- ・ 「第一生命館」をGHQに引き渡し。その後、6年10か月にわたり接收される
  - ・ マッカーサー元帥の部屋は、6階の社長室となった。この部屋の壁はすべてアメリカ産のくるみの木、床は檜・樺・桜・黒炭などの寄木細工でできた館内一の部屋であり、「最高の部屋に」という部下の要望がない決まった



1946年1月1日 第一生命館を出る マッカーサー元帥

1947年 星条旗が掲げられた第一生命館

昭和21年（1946）

- ・ 接收中の「第一生命館」には民政局が置かれ、この民政局において、2月4日から12日までのわずか9日間で、日本国憲法の原型であるGHQ草案が作成されたと伝えられている



## 返還

- |             |       |                              |
|-------------|-------|------------------------------|
| 昭和26年(1951) | 9月    | ・ サンフランシスコ平和条約調印             |
| 昭和27年(1952) | 7月    | ・ GHQが市ヶ谷の旧陸軍省跡に移転           |
|             | 9月17日 | ・ 6年10か月にわたる接收が解除されて正式に返還される |



1952年7月7日  
GHQからの返還受領式



※ 出所：「第一生命五十五年史」「第一生命八十五年史」「第一生命百年史」

第一生命館への本社復帰広告(上)と返還受領式であいさつする矢野社長(左)

Douglas MacArthur  
ダグラス・マッカーサー

## 60年経った今も、 変わらぬ マッカーサールーム

昭和27年(1952)の返還から60年を迎えたマッカーサー記念室。第一生命社長室として使われていたこの部屋は、日本の陸軍により接收され陸軍幹部の部屋となり、GHQ接收後マッカーサーの部屋となりました。

この部屋は、広さ約54㎡(約16坪)で、内装や調度品は、マッカーサーが使用していた当時のまま。インテリアは英国のチューダー王朝風です。壁に飾られた2枚の絵は、英国人画家F.J.オールドリッジによって描かれた「アドリヤ海の漁船」と「干潮」です。マッカーサーはヨット好きだったので、接收時この絵をそのまま飾っていました。

マッカーサー記念室に飾られているマッカーサー一家のレリーフは、日系2世のナンシー大山さんより寄贈されました。平成7年頃、カリフォルニアのTVで第一生命マッカーサー記念室が放映され、マッカーサー夫人が「日本で保管すべき」と言っていたことを思い出し、寄贈していただいたと伝えられています。

## マッカーサーの日常

マッカーサーの日常は、日本滞在時の住居としていたアメリカ大使館を午前10時30分に出て、第一生命ビルに向かうところから始まります。午後になるとすぐ大使館に帰って昼食をとり、短時間昼寝をした後、再び戻り夜遅くまで執務していました。部下にも重労働を強いたそうですが、自身もよく働き、目がかすんで時計の針がよく見えなくなるまでオフィスを離れようとしなかったそうです。日本の観光名所を訪れたりすることはもちろん、クリスマスはおろか自分の誕生日もお構いなしに、一週間丸7日ぶっ通しで働いたと伝えられています。

